

土呂部の半自然草原守れ

ススキ刈り初のポッチ作り

日光茅ポッチの会

【日光】希少植物を育む土呂部の貴重な草原を保全しようと、民間団体「日光茅ポッチの会」事務局・日光市萩垣面、飯村孝文代表(57)が26日、土呂部の草原でススキなどを刈り取って束ねる「茅ポッチ」作りに取り組んだ。会は2013年11月に発足し、茅ポッチ作りは今秋が初めて。飯村代表は「県内でも最大規模の土呂部の草原を守り、茅ポッチが並ぶ秋の美しい里山景観を残せるようにしたい」と意欲をみせている。(茂木信幸)

土呂部の草原は江戸時代以降、秋のお彼岸前後に地元住民らがススキなどを刈り取りポッチ作りを行い、1カ月ほど干して冬場の牛馬の飼料とするサイクルが続いていたという。人の手が入ることで維持される「半自然草原」は生物多様に富んだ自然環境を形成し、20数年前まで絶滅危惧種のアツモリソウの群落なども見られた。

ところが過疎や高齢化に伴い飼育農家も減少。1950年代に約24段に及んだ半自然草原も現在は約6段に激減し、森林

化が進む中でアツモリソウの群落も消滅してしまっただけでなく、危機感を抱いた元市職員の飯村代表が知人の自然愛好家ら約20人と会を設立し、約5段を保全対象に本年度から森林化を防ぐため低木を伐採するなど本格的な活動に乗り出した。

会設立後初となった26日の茅ポッチ作りには会員ら5人が参加。爽やかな秋空の下、地元住民が所有する

里山の草原でススキやヤマドリゼンマイを鎌などで刈り取って束ね、気持ち良さそうに汗を拭っていた。ポ

ッチ作りは10月初旬にかけて計4回行い、土呂部の草原に1カ月ほど並ぶ。

会員で初日の茅ポッチ作りに携わった県植物研究会幹事の長谷川順一さん(77)は「希少なムラサキやキセフタが自生する土呂部は草原性植物の宝庫。半自然草原は本県でほとんどなくなり全国的にも減少しており、土呂部の草原を守る。

ヘリも出動し 総合防災訓練

那須塩原市 市総合防災



防災ヘリによる救出訓練などを行った総合防災訓練

つていきたい」と話している。



茅ポッチ作りに取り組む会のメンバーら

訓練が27日、那珂川河畔公園で行われ、市や地元消防、警察、自主防災組織や自治会など官民47団体、約650人が大規模災害時の備え

台風接近による激しい雷雨が市内を襲ったとの想定。阿久津憲二市長を本部

【大田原】

「よさこい」にぎわう

大田原で天狗王国まつり

県内最大級のよさこいまつり「下野YOSAKOI与一まつり」をメインイベントとする湯津上地区のまつり「天狗王国まつり」が27日、佐良水の県ながわ水

遊園特設会場で開かれ、約

温 須付二都 リ 464 物



茅ボッチ 風物詩復活 日光

日光市土呂部の採草地に、ススキなどを刈って束ねて立てかけた茅ボッチが、整然とした姿を見せ始めた。里山の風景の再生が、静かに進んでいる。

過疎や高齢化で採草地の放棄が相次ぐ中、草原特有の多様性に富んだ自然と景観を守ろうと、昨秋、住民らが「日光茅ボッチの会」を結成。27日は、採草農家の山口スギヨさん(86)の手ほどきを受けながら会員ら8人が制作に汗を流した。

会代表の飯村孝文さん(57)は「人が手を入れることで、生き物でにぎわう独自の環境を育み、地域おこしにもつながる」と秋の風物詩復活を図る。作業は28日も続く。

(服部肇)

草原の風景保全



土呂部地区の草原の風景を守るため、茅ポッチづくりが行われた＝日光市で

日光・土呂部地区で「茅ポッチづくり」

日光市土呂部地区で二十八日、草原の風景を保全するための「茅ポッチづくり」が行われた。

旧栗山村の土呂部地区に残された草原の保全と山野草を束ねて作る茅ポッチの風景を守る

日光市土呂部地区で、昨年十一月に、市民や市職員らによって結成された「日光茅ポッチの会」の代表(五木)の主催。

同会によると、土呂部地区には、一九九〇年代後半まで約二十戸

の酪農家がいたが、高齢化などで現在は会員でもある山口聖治さん(六十一)に、牛などの飼料や敷きわらに使う採草地は年々減少し、森林化が進行している。

草原は約六割が残っ

たが、秋の風物詩でもあった高さ一メートルほどの「茅ポッチ」が草原に点在するのどかな里山の風景は、消滅の危機にあるという。

この日の活動には、二十代から八十代までの会員や地元住民など八人が参加。鎌を手に山肌広がる草原に生えるススキやキリンソウ、ワラビなどの山野草を刈り取り、次々と束ねていった。

茅ポッチは、一カ月ほど天日で乾燥させた後、厩舎などで使用する。

飯村代表は「ここは県内では最大級の半自然草原。希少な植物もたくさん生えており、冬までには、シカ対策の電気柵も設けるなどして、生態系を守っていききたい。将来的には観光資源にもなりうる」と活動の意義を説明している。

(石川徹也)

茅ボッチの里山 後世に

日光の住民取り組み

草原の多様性に富んだ自然を守り里山の景観を後世に残そうと、住民グループ「日光茅ボッチの会」が日光市土呂部の草原でススキなどを刈り取って束ねる「茅ボッチ」作りに取り組んでいる。山深い集落の草原にはわずかだが茅ボッチが整然と並び、里山の風景を演出している。

【花野井誠】

同会によると、旧栗

山村の土呂部地区は標高約920メートルに位置し、かつては肉牛の肥育が盛んで、1950年代には採草地が約24畝も広がっていた。茅ボッチは、秋の彼岸前後にススキやシダなどの下草を刈り取って縛り、五つの束を高さ約1畝の円すい形にまとめた干し草。約1カ月天日干しして冬季の牛の寒さ対策に敷いたり食べさせたりするサイクルが続いていたという。土呂部では草原に茅ボッチが広がる風景は秋の風物詩として親しまれ、各種フォトコンテストの題材になっている。

人の手が入ることで維持される採草地は「半自然草原」と呼ばれ、里山文化の一面だった。土呂部では江戸時代から草原が維持されており、長い年月をかけて生物多様性に富んだ自然環境を生みだし、二十数年前まで絶滅危惧種のアツモリソウの群落も見られた。しかし過疎や高齢化、産業構造の変化などによって飼育農家も減少し、採草地も今で

ススキやシダを円すい形に天日干し

は約6畝まで減少した。管理放棄された採草地は森林化が進み、アツモリソウの自生地も消滅。面積が減少したものの土呂部の半自然草原は県内で最大規模という。

こうした事態に、元日光市職員の飯村孝文さん(57)が地元住民らに「土呂部の貴重な草原を守り、継承しよう」と呼びかけ、2013年11月に「日光茅ボッチの会」を結成。地元のお年寄りや採草農家と交流を図りながら里山文化や半自然草原の大切さを学び、この秋初めて茅ボッチ作りにこぎつけた。

9月下旬には週末を利用して会員や住民が集まりススキやキリンソウ、ワラビなどを刈り取り、お年寄りの指導を受けながら茅ボッチ作りに汗を流した。飯村さんは「古くから自然と人間が共存しながら維持してきた里山の素晴らしい自然環境と茅ボッチの立ち並ぶ美しい風景を残し、多くの人に伝えたい」と話している。茅ボッチ作りは10月4日も行われる。

25 栃木 栃木 2014年(平成26年)10月3日(金)

栃木

TOCHIGI
usunomiya@manichi.co.jp



草原で茅ボッチ作りに取り組む飯村さん(右)＝日光市土呂部で